

開催報告

秋学期FDプログラム

「なぜ学生のレポートは『論理的でない』のか—高大接続から見直す生成AI時代のライティング指導」

[2025年12月18日]

大学教育開発・支援センターでは、高大接続の観点からライティング指導を再考する機会の提供を目的として、秋学期FDプログラム「なぜ学生のレポートは『論理的でない』のか—高大接続から見直す生成AI時代のライティング指導」をオンライン開催しました。講師には、国語教育、高大接続をご専門とされ、高校における「書くこと」の指導を研究されている島田康行先生（筑波大学 人文社会系 教授）をお招きしました。立教大学教職員のみならず学外の方にも広く公開し、計 93 名の方々にご参加いただきました。



島田 康行 先生

プログラム前半では、島田先生より「高大の双方で育てるライティングの力」という題で、高校までの国語教育における「書くこと」の指導実態について、ご講演をいただきました。まず、指導要領からみる高校教育の内容について、2018年告示・2022年施行の新課程の指導要領では、「現代の国語」や「論理国語」が話すこと・聞くこと・書くことの領域を重視した領域として設置されていることが説明されました。上述の科目では主張、根拠、論拠という論証の要素が指導事項に含まれ、これから大学には徐々に論証の基礎を学んだ学生が入学することが想定されます。しかし、島田先生は、使用する教科書によって学習内容に差があることを強調されました。例えば主張の根拠の定義をめぐって、事実のみが認められるのか、事実以外の表現も採用してよいのかは異なっています。学生の理解には少なからず「でこぼこ」が生じているため、大学での指導にあたっては、レポートの型や根拠の性質を学生と共有する必要があることが示されました。また、新課程の指導要領には「批判的思考」が明記されたことにも触れられ、引用して批判する練習が表現の質の向上に効果的であることが強調されました。

後半には、学生のライティングにおける躓きを再現した仮想レポートを用いた事例検討を行いました。参加者は仮想レポートを読み、教員側のレポートの出題設計に関わる問題と、学生のライティング課題を、オンラインボードのPadletに書き込みました。参加者



▲参加者からの書き込み

からの書き込みを受け、島田先生は、レポートとは教員と学生のコミュニケーションツールであること、出題にあたっては、レポートの型、評価観点、レポートを完成させるために必要な手順を学生と共有する重要性を述べられました。また、学生が個人の体験を根拠とするという背景には、高校までの小論文指導の中で書き手の当事者性が強く求められてきた影響があると分析されました。最後の質疑応答では、参加者からライティングの効果的な指導について質問が寄せられ、学生同士に評価させるピア・レビューの有効性や、オンラインからコピーさせずあえて紙の文献から一言一句書き写させるという、引用の練習方法が紹介されました。学生の生成AI利用に関する質問に対しては、「良い書き手を育てる」という目的に照らし、生成AIの使用方針や方法を教員が明確に示すことが重要であると回答されました。

大学でのライティング指導の出発点を知り、高大接続というテーマとライティング実践を結びつける機会となりました。ご登壇いただいた島田先生、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 名倉 早都季

次ページ「生成AI時代における社会と大学の変化」インタビュー

当センターからのお知らせ（本学教職員向け）

● 動画「なぜ学生のレポートは『論理的でない』のか：高大接続から見直す生成AI時代のライティング指導」

上記秋学期FDプログラムの動画を公開しました（本学教職員限定）。

<https://portal.rikkyo.ac.jp/preview-link/node/6370/0fecf2f4-ce94-4597-be46-79dc8ffef500>

● レポート作成支援ツール『Master of Writing』のご案内

大学教育開発・支援センターのホームページでは、全学部に通ずる基本的なレポートの書き方のポイントをまとめた『Master of Writing』を掲載しています。学生へのライティング指導にご活用ください。

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe/master.html>

生成AI時代における社会と大学の変化 —新たな人材像としてのAIジェネラリスト—

2022年以降、生成AIの急速な普及に伴い、社会における人間と生成AIの関係は変化し続けています。こうした状況の中、生成AI時代の学生に対し、どのような学びや教育が考えられるでしょうか。本号では、社会学部の和田伸一郎教授にインタビューを実施し、生成AIの普及がもたらす社会の変化、それに伴う大学での学びや教育への影響、そして社会学部のSDSコースが掲げる人材像と取組みについてお話を伺いました。

インタビュー

和田 伸一郎 教授 (社会学部)

インタビュアー

高林 陽展 教授 (大学教育開発・支援センター 副センター長)

豊田 英嗣 助教 (大学教育開発・支援センター)

名倉 早都季 助教 (大学教育開発・支援センター)



和田伸一郎先生

—生成AI時代における労働市場への影響

豊田：生成AIの進展と普及が進み、社会にはどのような影響が生じているのでしょうか。

和田：生成AIの進展は目覚ましいので、あくまで現時点で確認、推測される話になることを最初にお断りしておきます。2025年、アメリカで、新卒の失業率が他の世代に比べて増えたという調査結果が複数報告されました。とりわけ、シリコンバレーのテック企業のエンジニア職やMBA保有者などの高度人材や過去の判例などを調べるといったパラリーガルなどの職種での採用が減っているようです。こうした領域は生成AIが得意とするところだと考えられます。

日本でも、このような変化が起こりうると指摘されることもあります。ただし、日本の場合は、人口減少による人手不足という状況があるため、アメリカと同様の現象が起きるかは分かりません。

名倉：社会で生成AIが活用される中で、問題は生じていますでしょうか。

和田：近年の欧米の報道では、「AI スロップ」という言葉が聞かれます。これは、一見洗練されているようには見えながら、実際には生成AIによって大量生産される、低品質なデジタル成果物のことを指します。企業の現場で、生成AIを適切に扱うことができず、内容の真偽を確かめないうまま粗悪な「AI スロップ」を部下が提出してしまうことで、そのチェックのために上司の膨大な時間が奪われる、という現象が起きていると言われています。生成AIによる効率化どころか、逆に非効率

な状況が生まれているという皮肉な状況です。

高林：コンテンツ産業などでも同様のことが言えそうです。人間には、生成AIの成果物をチェックし、倫理的・社会的な問題がないかを確認する作業が求められている気がしています。

—学修での生成AIの活用方法と 生成AI時代に対応した評価

豊田：労働市場の変化や「AI スロップ」といった問題は、学生の学びにも関連しているのでしょうか。

和田：あくまで個人的な印象ではありますが、就職活動やインターンシップの競争率が激化しているように感じます。実際、就職活動に取り組む学生からも同様の声を聴きます。こうした中、研究活動のアウトプットを早めに出すことが求められているように感じます。具体的に言えば、3年生の夏に長期インターンシップに取り組む学生が多いので、その選考に向けて研究活動の成果を語れるようになっていたほうがよいと感じています。私のゼミでは、3年生の春・秋学期それぞれにて、グループ研究としてX(旧Twitter)大規模データ分析を行っています。3年生の春学期中にゼミ活動のアウトプットを出せていると、選考でアピールがしやすいみたいです。

また、「AI スロップ」の問題は、学生のレポート課題でも起きています。本来、学生がレポートを書くには、関連する書籍などを読み、概念や語彙をマスターしておくことが大切で、修練をする、努力をするというプロセスを踏む必要があります。そうした努力をしたうえで、課題に行き詰まった際に生成AIを活用

する場合には、本人の伸びしろを伸ばすことにつながると感じています。ですが、いたずらに生成 AI を活用することで、そうした努力をスキップして課題に取り組んでしまう場合もあります。その場合、学生は生成 AI による成果物に含まれる概念や語彙を正しく理解できず、その正誤をきちんと判断することができません。そして、「生成 AI が言っているから正しい」と考えてしまい、そのまま課題を提出してしまいます。生成 AI は常に「断定口調」で答えるという性質があります。ですが実際には、生成 AI はプロンプトが甘い手を抜きますし、ハルシネーション⁽¹⁾の問題もあります。

高林：学生の学びに対する態度に関しては、高校までの教育の影響もありそうです。授業をしていて、学生がとりあえず「ここでの正解は何か」を考えようとする傾向が強い気がします。その結果、生成 AI が出した「正解のようなもの」に飛びついてしまう。本来は、どれだけエネルギーをかけて考えたかというプロセスこそが、学びの近道のはずなのですが。

豊田：学生が生成 AI を活用して学修に取り組む場合、どのような点に留意すればよいでしょうか。

和田：使い手が生成 AI の成果物の内容を理解し、きちんとコントロールすることが大切だと考えています。例えば、社会学部では、卒業論文を3万2千字以上と設定しています。学生はそこまで長い論文を書いた経験がないので、研究の構成や順番、接続について煮詰まってしまう。こうした時、学生は、自ら作成した章立て案や、考えがもつれている具体的なポイントをプロンプトとして入力します。すると生成 AI は、論点の整理や接続詞の提案、章の構成提案などを行ってくれ、人間がもつ「学び疲れ」という有限性を解決してくれます。人間は思考すると、疲れが生じ、考えがもつれてしまいます。その時に生成 AI をうまく活用すると、もつれてしまった糸をほどいてくれます。結果として、その人は自分の力だけでは進めなかった先にまで進むことができるようになります。

ここで重要なことは、学生が「自身の思考データ」を生成 AI に入力しているため、学生が生成 AI の回答を完全に理解できるという点です。入力と出力の内容を正確に理解し、きちんとコントロールすることができていれば、学修を進めるうえで

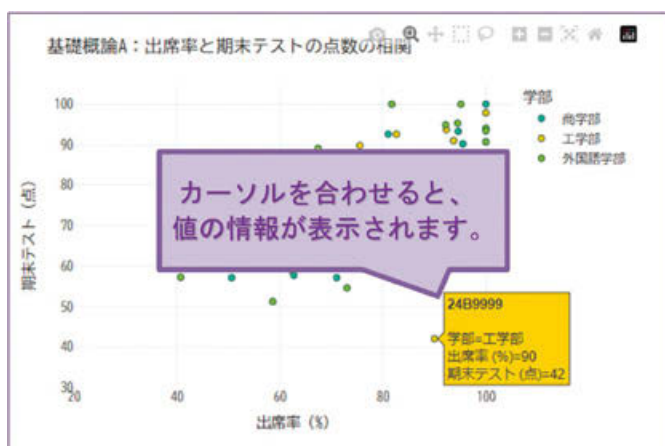


図1 PythonにてPlotlyを活用し、作成した散布図の例(ダミーデータを基に助教作成)

生成 AI を活用するほうがむしろいいのではないかと考えています。実際、今年度に卒業論文に取り組んだ学生は、自ら分析モデルを設計し、データの作成と分析を行いました。こうした一連の作業を実行するためには、合わせて数千行にもなるプログラミングコードを書く必要がありました。学部生にとってはかなり負担が多い作業ですが、自らの研究設計に照らし合わせながら生成 AI を活用したことで、一連の作業を達成しました。当該学生は、生成 AI を活用しなければやり遂げられなかったと言っていました。

名倉：一方、教員が留意すべき点はあるでしょうか。

和田：学修成果のアウトプットの形は多様化されるかもしれません。例えば、生成 AI を活用すると、PythonにてPlotlyというライブラリを使用し、インタラクティブなhtml形式のグラフを容易に作成することができます⁽²⁾。そうして作成された散布図では、値にカーソルを合わせると、その値に関する情報をすぐに見ることができます(図1)。こうしたツールを卒業論文に活用する場合、紙ベースでの論文提出としてしまうと、せっかくの機能が活用されません。例えば、メディアアートなど芸術系の大学や学部で採用されている卒業制作のように、研究内容を展示し、触ってもらうというような学修成果のアウトプットの形を取り入れることも一案かと思えます。

評価形式に関しては、生成 AI が当たり前の時代においては、調べもの系のレポート課題というのは意味をなさなくなりつつなっています。学生に代わって、生成 AI が簡単に課題をこなしてくれてしまうので。特に文系は、文字ベースで課題を出しますので、生成 AI が書いたのか本人が書いたのかは判断がつかみません。大阪大学が作成した生成 AI 教育のガイド⁽³⁾ をみますと、そこに生成 AI と評価形式との関係が記載されています(図2)。図の中で、赤く囲われている箇所は生成 AI が得意とする領域を指しています。生成 AI の影響を考慮すると、知識・理解や思考・判断を評価したい場合、筆記試験やレポート課題よりも面接試験の方が効果的だといえます。ですが、大規模な授業では、面接試験の実施は現実的ではありません。その点は引き続き課題かと思われます。立教大学だけに関わらず、大学における評価システム、評価の仕方を変えていく必要があるかもしれません。

生成AIのインパクト大

	知識・理解	思考・判断	技能	関心・意欲	態度
筆記試験	○	○			
論述課題	○	○			
レポート課題	○	○			○
観察法	○	○	○	○	○
口述(面接)試験	○	○		○	○
実技・実演		○	○	○	○
ポートフォリオ			○	○	○
自己評価				○	○

図2 既存の評価形式に対する生成AIのインパクト(参照:大阪大学「生成AI教育ガイド」https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/project/generative_ai/)

—データから独自の視点で社会課題を 見つける橋渡し役「AIジェネラリスト」

豊田：大学での学修・教育が変化する中、社会学部では SDS (Social Data Science) コースが設置されたといいました。SDS コースは、どのような目的のもと設置されたのですか。

和田：SDS コースが掲げる人材像を「AI ジェネラリスト」と表現しています。「AI エンジニア」が、サーバー構築、コード作成など上流から下流までの全体を担う専門職であるのに対し、「AI ジェネラリスト」とは、エンジニアと他の人材をつなぐ橋渡し役のような存在です。「AI ジェネラリスト」は、自分で全てのコードをかけなくても、AI やデータの性質を理解することで、目の前のデータを独自の視点で解釈し、社会課題を見つけられます。SDS コースではそうした人材の育成を目指しています。

豊田：SDS コースでは実際にどのような授業が行われますか。

和田：授業の一例をあげると、実在するドラッグストアチェーン店から実際の POS データ（販売時点情報データ）を提供していただき、そのデータについて分析を行う授業があります。様々な商品を取り扱う数店舗分のデータになるので、データ量は膨大です。学生は、その膨大なデータを切り取り、分析を行います。熱量の高い学生は、どんどん生成 AI を活用し、「〇〇なデータを、XX な手法を使って分析したいのでコードを書いてください」といったプロンプトを作成し、課題に取り組みます。生成されたコードを実際に入力してみて、エラーが出ればその修正を行うといった作業を繰り返します。20 人定員の授業ですが、そこに来る学生は意識ややる気が高いです。なお、学生の分析結果は、最後に企業の方に向けて発表をし、講評してもらっています。

POS データは昔からあるデータで、企業側で行う分析視点や手法の王道みたいなものが存在します。それに対し、学生は、社会学の知見を含めたオリジナルな視点で分析を進めます。発表後には、企業の方から「こんな発想で、考えたことがなかった」という驚きのコメントをもらうこともあります。

名倉：生成 AI を活用しながら、データの背後にある課題を自分の視点で掴むことが重要ということでしょうか。



インタビューの様子

和田：SNS 上には、様々な社会課題を抱えた人が匿名で支え合っているコミュニティが、見えにくいですが、存在します。私のゼミでは、そうした当事者のデータを集めて、分類し、人間の行動パターンを明らかにする分析を行っています。こうしたデータの背後にある社会課題をオリジナルの視点や感性を通じて見つけることが重要だと考えています。

AI 人材というと、従来は理系のイメージが強かったように思います。しかし、SDS コースでは、社会学をはじめとするいわゆる文系の学問領域に根ざした視点を持って、生成 AI を活用しながらデータを分析し、その背後にある社会課題を見いだせるような、生成 AI と協働できる人材を育成していきたいと考えています。

【注釈】

- (1) 生成 AI が、事実でない情報をあたかも事実であるかのように出力する現象を指します。
- (2) Python はプログラミング言語の一種で、Plotly はインタラクティブなグラフ描画を行う Python のライブラリです。
- (3) 大学教育開発・支援センターと情報企画室は、RIKKYO PORTAL サイトにて生成 AI の利活用に関する情報をまとめた Web ページを作成しています。同ページの教職員向けコンテンツでは、他大学や省庁・国内関連機関における関連サイトや大阪大学の「生成 AI 教育ガイド」のリンクを掲載していますので、ぜひご参照ください。

https://portal.rikkyo.ac.jp/generative_ai/staffs

(要 V-campus ID)

インタビューまとめ：助教 豊田 英嗣

編

今号では、生成 AI の普及による労働市場での変化や大学での学びや教育への影響についてインタビューを実施しました。生成 AI が社会に急速に普及しつつある時代であるからこそ、その使い手である「人間側の責任の重さ」を改めて感じました。本記事が、学生の学びを深める生成 AI との関わり方について考える一助となりましたら幸いです。生成 AI の技術進化のスピードは目覚ましく、今後も教育や学びの現場への影響は拡大していくと考えられます。当センターでは引き続き動向を注視し、有益な情報を発信できるよう、努めてまいります。(豊田)

集

後

記

「MOVE 第35号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL 部会 ニュースレター

2026年3月19日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL 部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4624 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp



<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>